

## 発育期バレーボール選手における腰椎分離症の特徴

山田 隼也<sup>1</sup>, 三浦 大輝<sup>1</sup>, 紙谷 武<sup>2</sup>, 福山 陽子<sup>3</sup>, 米田 實<sup>3</sup>

1. 米田病院 リハビリテーション科
2. 東海学園大学 スポーツ健康科学部
3. 米田病院 整形外科

### 【目的】

発育期バレーボール選手における腰椎分離症の特徴を調査すること。

### 【対象と方法】

2015年1月から2022年7月までに腰椎分離症と診断されたバレーボール競技者の25名を対象とした。診療録記録から後方視的に調査を行った。調査項目は年齢、性別、罹患高位、罹患側、初診時の病期、癒合率、ポジション、利き手側を調査した。病期は西良の水平断分類を用いて評価をし、癒合率については3ヶ月経過観察が可能であった21例を対象とした。

### 【結果】

L5の分離が最も多く、次いでL4に多く見られたが、L3も全体の16.7%に発生していた。罹患側は左側に多く認められ、左側のみの分離症は13名18椎体に認められた。左側のみに分離症を認めた13名のうち、12名は右利きであった。また、多椎体症例4名のうち3名は片側のみに分離症が見られた。病期は超初期19ヶ所、初期13ヶ所、進行期前期3ヶ所、進行期後期3ヶ所、終末期2ヶ所であった。骨癒合率は3ヶ月の経過観察が可能であった32ヶ所の調査を行った。病期別の癒合率は超初期14ヶ所中13ヶ所(92.9%)、初期13ヶ所中7ヶ所(53.8%)であり、進行期以降の症例に骨癒合は認めなかった。

### 【考察】

発育期バレーボール競技者における腰椎分離症は多椎体であっても利き手と反対側の片側例が多く、上位腰椎に発生する症例も他種目のスポーツと比較して多い傾向であった。